
Luna

繰言 無為

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Luna

【Nコード】

N7446C

【作者名】

繰言 無為

【あらすじ】

『白い道化』それが俺の持つ銘。『漆黒の魔女』それが私の背負う業。一人の少年と独りの少女はある殺人鬼を焦点に出う。これはただそれだけの物語。地獄で笑う少年と咎を背負う少女と唯一の殺人鬼の物語。白く、黒く、真赤に染まる月の物語。

序夜 第一幕『狂月の道化』

月が出ていた。

墨を流したような真つ黒な、高層ビルに切り取られた空に、唯一つ煌々と、冴え冴えと其の月は出ていた。

——『もののあわれ』からは程遠いよな。

俺はそんな感想を抱きながら一人、深夜の街を歩いていた。カラン、とかすかに手に提げたビニール袋に入ったコーヒーの缶が音を立てた。

コンビニからの帰り道。

歩きなれた街の歩道。

吐き出した息が白く染まって流れていく。白く、白く、白く——。

路は次第に細くなっていった。歩道と車道の区別はなくなり、通りを彩る現代的なビルは使い込まれた民家の玄関へと変わっていく。

——良いな、この空気。

俺はこの空気が好きだった。真夜中の住宅街、その緩やかにして重厚な静寂の空気が。

ふ、と笑う。

面白い、と思ったわけではない。ただ、笑っただけ。意味もなく笑う。其れが俺と言う人間だ。よく笑い、泣きはしない。

其れが俺の存在定義。

原初にして最初の定義。

俺は泣かない。嘆かない。怒らない。悲しまない。唯、笑っただけだ。

——白い道化。

滑稽なる存在にして、身分の外社会の外に存在する者。

俺は歩く。

笑いながら、足音を響かせて。

風が吹いた。外套の裾が風に靡く。

空を仰げば月。

漆黒の空に浮かんだ月はただ滔々とその存在を夜空に浮かべていた。

俺は地上へと視線を戻した。

何時の間に來たのか、其処には二人の人間がたっていた。

男性と、女性。男性はスーツの上から使い古した外套を羽織っていて、その太い顔に笑みを浮かべていた。それなりに年配で髪には既に白い物が混じりだしている。女性のほうはと言うと、同じくスーツ姿の上から外套を羽織っているのだが、こちらの外套は男性の其れとは違って明らかに高級そうな其れ。ファッションに気を配っているのがありありと伺える。因みにこの人は男性のほうとは違ってたかなり若い。三十台前半か、ともすれば二十台にも見えなくはない。

「こんばんは」

俺は笑って挨拶をする。

あいも変わらず風が吹いている。

三人分の外套が翻って、外套の光に影を作る。

「刑事さんが俺に何か御用でも？それとも補導しに來たとか？」

「てめえなんざ補導するかよ。まどろっこしい」

俺の軽口にも男性のほうの刑事がぼそつと答えた。

不機嫌なのではない、いつもこんな感じの口調なのだ。

「では、依頼？」

「そつちはもつとありえないだろうが。警察がそんなことするわけないだろうが」

そのやり取りを聞いて、女性のほうの刑事がクスツと笑いを漏らした。

おそらくは相棒があつさり口を利いたのが面白かったのだろう。

この男性の刑事は滅多に口を利かないのだ。

「ま、わかつてると思うけど先週から起こっている事件のこと

よ。」

「と、云うと例の暴走族の連続逮捕劇？」

俺はおどけるように両肩を上げる。

「成功してるのに何で話聞かなきゃなんねえんだ」

「さあ？其れは俺には測りかねます」

ちつ、と舌打ちする男性刑事。女性のほうは未だあいまいに微笑んだままだ。

「分かってますよ。例の連続通り魔事件のことでしょう？」

「ええ、何か知らないかしら？」

「知りません」

轟、と一際強く北風が吹く。

「そもそも、俺の近くの人間は誰一人殺されていませんからね。なら俺の出る幕はありません」

「よく言っぜ、白い道化が」

男性刑事は吐き捨てるように言ったが、眼は笑っている。まあ、これは親しさ故のと言うところだろう。

「ま、そういうわけですからもう言ってもかまわないでしょう？
コーヒーも冷めてしまったことだし」

「もともとアイスじゃねえか」

僕のボケに律儀に突っ込んでくれた刑事とその相棒に笑いながら会釈して僕は通り過ぎた。

——さて、どうしようか？

見上げた空には煌々として、曖昧な月が唯一人地上を見下ろしていた。

序夜／第一幕『狂月の道化』（後書き）

おそらくは始めまして。

序夜の第一幕、『狂月の道化』はいかがだったでしょうか？未だ序章に過ぎない場所ではありますが楽しんでいただければ幸いです。
次幕、『茨の魔女』へ続く。

序夜 第二幕『茨の魔女』

月が出ていた。赤く輝く月。夜空に唯一つ浮かぶ其れを視て私はわずかに唇の端をゆがめる。

赤い月を見るのは随分と久しぶりだ。何時以来だろうか。もう思い出すことも出来ない。

私は月へと注いでいた視線を再び地上へと戻すと、再び歩みを再会した。

歩き慣れた住宅街の路地。かすかにうなりを上げる街灯と夜の闇が非対称的な陰影を作り出している。私の影が街灯に照らし出されて光から光へと刻々と大きさを変えながら移っていく。

夜気を切り裂いて歩く。私の唇から漏れた白い息が後ろへと消えていくのが眼の端に映った。

——唐突に思い出した。そうだ、あの日だ。赤い月を見たのは。確かにあの日私は見たんだ。あの血を啜ったように赤い、殺意のように紅い、怒りのように緋い、この月を。

「……………はは、」

私は笑った。滑稽だ。まさかこんなことまで忘れてしまっているとは。……忘れはしないと誓ったはずなのに。あの日の惨劇に、そう盟約を交わしたはずなのに。何をしている？ 酔うな、甘えるな、独りであれ、私は——咎人なんだ。

——漆黒の魔女

私の最初の盟約にして、私の背負うべき咎の名称。

誰よりも罪深き、黒衣の魔女。神に逆らう反逆の大罪人。其れが私。謎を解く者の背負うべき原罪。

北風が凪ぐ。風の吹かない真冬の路地を私の足音だけが席卷する。

紅い月を背に私は歩いていった。

そして、角を曲がり。

私は絶句した。

其処は、血の海だった。

道路一面に広がる血の海。地面を舗装したアスファルトを余すことなく覆いつくす其れは周囲の民家に咲いた薔薇にまで飛び散り、地獄絵図を描き出していた。ムツとする程濃厚な鉄の匂いが鼻につく。原材料、人間。そんな場所の中心点に、その人物は立っていた。返り血にぬれた紅い外套。顔にはご丁寧にも髑髏の仮面をつけて、足元に有る物体を見下すように其処に立っていた。

私の全身から奇妙な汗が噴出した。おそらくは氷点下に達するであろうこの気温にも関わらず私の頬を汗が伝った。

――、落ち着け。殺人現場も殺人者もこれが始めてじゃない。何時もやっていることだ。落ち着け。

私は自分に呼びかけながら、しかし指先が震えるのをとめられなかった。其れはきつとこの状況への恐れからではなくきつと、この仮面の殺人者への恐れだ。

この殺人者はおかしい。

何が？

死体を前にして動じていないから？

違う。そうじゃない。

でも、なにが？

私はここ数年で一度も無かったほど狼狽し、混乱していた。この殺人者は何かがおかしい。其れだけを私の勘が告げていた。

にやり、と髑髏の仮面が笑った。

無論、仮面に表情などあるはずが無いのだが私はそう感じた。

そして、狼狽する私を尻目に踵を返して逃走した。

闇に消えていくその人影を見ながら私は其れを追えなかった。

やがて、其れまで響いていた足音が消える頃になってようやく私は

自分の体がぐつしよりと汗でぬれているのを自覚した。

心臓が痛いほど鳴り響いていた。

そして、私はその時になって私の恐れの本体を初めて知った。私が恐怖を感じたのは仮面の殺人者ではなかった。其れは死体だった。

私は靴が血でぬれるのもかまわずに其の死体に近づいた。

傷跡を見る。

頸動脈、手首、足の付け根。大きな血管が通っている場所ばかりを狙った傷口。それでいて心臓には――心臓の存在する胸の辺りには

――傷一つない。

「血液……」

これは血液を故意に流させるための傷だ。血を流させ、失血死させる。おそらく、あの犯人は最後まで見届けたのだらう。傷つけられ、もだえ苦しむこの人の姿を。

――血液狂いの殺人鬼

私は携帯電話を取り出して、知り合いの刑事に電話した。

紅い月の元、私と、血を流しつくした死体と、血にぬれた紅く、赤い、緋い、真紅の薔薇だけがただ静かに佇んでいた。

序夜〱第二幕『茨の魔女』（後書き）

序夜、は此処までです。次回からは本編がようやく始まります。
次幕、『探偵倶楽部〱ミステリーサークル』へと続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7446c/>

Luna

2011年1月19日23時56分発行